

様に型を演武するとしたならば、かなり大変な事だと思う。覚えた型をただ連二無二繰り返すのは、下手をすれば、一生懸命やったという自己満足の陥穽に落ち入る可能性がある。類型をただ積み重ねただけのナルシズムに。（『遍稽古』の否定ではないので、念の為）

◎小林秀雄氏が『本居宣長』の中で宣長の歌論から「姿は似セガタク、意ハ似セ易シ」といふ言葉を引いてゐる。（中略）これを私流に下世話に言つてしまへば（中略）「外に出た行為としての姿形は何々の積もりだけではどうにも様にならない。積もりだけなら聖人に成れたとしても姿となるとこれはおおごとだ」と言ふ事になる。

◎氣持などといふものは形が無いものですから、いや、形に見へなくても、結構これこれの氣持だと思ひ込めるもので、止め度無く自己陶醉、自己欺瞞に陥り、実際には無いものが自分だけには有る様に思へて、相手役はもちろん、観客まで無視した芝居になります。

〔型や竹刀稽古において、一生懸命（三昧）になれたと自己陶醉するのは、氣持というものは目に見えないから、勝手に思い込むことができるが、姿としての氣・剣・体の一致は見えるだけにすぐ見破られてしまう。そこで故小川忠太郎先生が、晩年語っておられた言葉が思い出されるのでありますが、その言葉と、この点はまさに一致すると思うのです。即ち「いくら三昧になっても、氣・剣・体が一致しなければ三昧にはなれない」と。〕

以上、福田恆存氏の演劇理論の『一刀流型』にも通用するとおぼしき点を、私的解説をはさみながら書き並べてみました。

最後にもう一つ、『典型』・『写実』（真剣・リアル）に迫られるのではと言う、一方法論（私的一仮説）を述べさせていただきたいと思います。

先に恆存氏が言われた、「個人の全体性の恢復（又は生甲斐の恢復）をする唯一の道は、自分が部分にすぎぬことを覚悟し、意識的に部分としての自己を味はひつくすこと。その味はひの過程において全体感が象徴的に甦る」と言う事。その一助に、かかる方法論がなり得るのではと思うのであります。「意識的に部分としての自己を味はひつくす」。時間的に言えば、未来・過去という「前後を暗黒化」し、現在に意識を垂直に引き下ろす行為によって得られる時間的全体感の把握。別な言葉で言えば、実在感・充足感・必然的生・生甲斐の把握。それができるのでは思うのです。「貪婪に現在を飲み干し」「時間の経過を強烈に味はひ」そして、「足下の現実が時々刻々と動いてゐるのを実感する」と言う劇的な瞬間が味わえるのではなかろうかと思うのです。

以下簡略に仮説を展開していきます。

「一刀流型」より、以下の9本だけを抜き出し、しかも順番を順不同に、打太刀の演武者の意にまかせて打ち込ませる。

打太刀の演武者の構えは9本とも「陰刀」。仕太刀の演武者の構えは9本とも「正眼」。つまり打太刀から何が、どう出て来るかは、一寸先は闇である。即ち仕太刀の所作の記憶は、打太刀の打込むギリギリの瞬間まで闇から浮かび上がっては来ず、まさにこの時、未来・過去という時間上の「前後は暗黒化」されていて、現在に意識が垂直に交叉している筈だ。

そして、この行為をできるだけ速く順不同に繰り返すことによって、現在は貪婪に飲み干され、時間の経過が強烈に味わわれ、「足下の現実が時々刻々と動いてゐるのを実感」できるのではなかろうか。「その間の時間を光として感じる」事ができるのではなかろうか。「意識的に部分としての自己を味はひつくす、その味はひの過程において全体感が象徴的に甦る」のでは。その時、